

地域連携による繊維素材教育の実践

Educational Activities Report on Education of Textile Material Science by Regional Collaboration

太田 幸一

Kouichi OHTA

Abstract

We started an action to plan promotion of the local industry in 2017, in cooperation with local public entity and trade group. This cooperation utilizes the museum "textile material center" of the fashion material in Hashima-shi in the education base. As one of the actions, we used material of the textile material center for education of the textile materials science. In the training in the textile material center, we let students experienced it by touching the material directly, and they understand the feel and the characteristic of the textile material. Furthermore, we let a student understand a production of warp knit process by observing the knitting factory. As a result, improvement of the interest of the student was confirmed for textile materials science.

Keywords :地域連携、教育実践、人材育成

1. 緒言

日本国内の繊維産業においては、産地における高齢化の進展や大学における繊維関係学部・学科の縮小などにより、産地における人材力の低下は深刻となっている。この問題は本学の近隣産地である尾州産地においても同様である。

尾州産地の課題に適切に対応し、次世代の繊維業界を担う人材育成を図り、産地の発展に資することを目的とし、本学、岐阜県毛織工業協同組合、羽島市の三者は「テキスタイルマテリアルセンターを教育拠点とした地場産業の振興に関する協定」を平成 29 年 3 月 28 日に締結した。この協定は、羽島市にあるファッション素材の資料館「テキスタイルマテリアルセンター」を教育拠点に活用し、地場産業の振興を図ることを目的とするものである。

テキスタイルマテリアルセンターは国内最大の生地見本の資料館の機能を有し、約 10 万点の収蔵品が納められている。この収蔵素材を本学生活デザイン学科の学生の教育に活用することで、ファッション分野の人材育成につなげていく。

この取り組みの一環として、生活デザイン学科の専門教育科目である「生活材料学」において、テキスタイルマテリアルセンター収蔵の素材に直接触れる「ウール講座」を設定することによって、学生達にテキスタイル素材の触感と特性の理解を深め、繊維素材への興味を向上させる教育の実践を行った。

2. ウール講座の実施

(1) 実施内容

生活材料学は 1 年前期に開講される科目で、生活デザイン学科の専門教育科目のうちの基礎科目として位置づけられており、アパレル製品を始めインテリア製品にも多用されている繊維製品を中心に、材料の種類、構造、特徴と性能、製造方法、利用分野などを解説し、生活材料の適切で合理的な利用方法を理解することを目的としている。講義中では材料見本を供覧し、実際に素材を手にするにより、各種素材の触感や風合いを体感することにより繊維素材の特徴を理解することも大きなポイントである。なお、ファッション専修は必修科目（衣料管理士資格の認定科目）、建築・インテリア専修およびヴィジュアル専修は選択科目となっている。今回、羽島市との連携事業の一つとして、ウール素材について、その特徴を把握させるために実際の素材に直接触れるとともに、製造現場を見学するウール講座を生活材料学の講義の一環として実施した。生活材料学の 15 回の講義のうち 2 回相当の講義をこのウール講座に割り当て、今年度は平成 29 年 6 月 15 日（木）の 1・2 限に実施した。当日の実施内容は、

- (a) テキスタイルマテリアルセンターの施設見学
および素材の閲覧・解説

テキスタイルマテリアルセンター収蔵の 10 万点もの素材を実際に閲覧することにより、各種素材の触感、デザイン性などについて実物を通して体感し習得してもらった。また、興味のある素材を選択し、マテリアルセンターの岩田講師により生地・製法の解説をおこないテキスタイル素材の理解を深めた。

- (b) 工場見学（（有）マルセンニット工業 岐阜県羽島市

上中町一色)

経編の製造現場を見学し、経編の製造工程と経編生地の特徴について理解を深めた。通常の講義内の説明では判りづらい、経編の編成原理などを実機により把握させた。

なお、実施に当たってはファッション専修の教員4名が分担して指導するとともに、岩田講師、山田専務理事のサポートを受けた。テキスタイルマテリアルセンター見学時の様子を図1に示す。



図1 テキスタイルマテリアルセンター見学時の様子
(2) 効果測定

本学では各学期末に学生に対して授業評価アンケートを実施している。連携事業の実施効果測定として、生活材料学における授業評価アンケートの結果について、昨年度の結果との比較を行い、分析を行った。回答数および回答率を表1に、質問項目を表2に示す。

各設問について5段階評価とし、設問別平均値をレーダーチャートに表したものを図2に示す。各項目での変動があるものの、全体平均は昨年度、今年度ともに4.2であり、例年並みの学生からの評価結果となっていた。ここで、15問の設問の内、多くの項目は連携事業以外の講義内容の影響が大きいものであるため、連携事業の効果が結果に反映されやすいと考えられる問8、問9、問15について分析を行った。問8「あなたは、授業内容をよく習得または理解できましたか」については、今年度は昨年度より0.2ポイント低下した。しかし、図3に示す構成比を見てみると、C「ふつう」と回答した学生が増えているが、D「ところどころできなかった」E「ほとんどできなかった」と回答した学生は変化しておらず、大幅な理解度低下となっていない。これは、「ウール講座」を2回分追加したことにより、従来分の内容を13回で解説することとなり、ウール講座以外の講義内容がやや不十分となったためと考えられる。これについては再度シラバスの見直し等が必要であろう。

表1 アンケート回答数および回答率

| | 平成28年度 | 平成29年度 |
|--------|--------|--------|
| 履修登録者数 | 62 | 52 |
| 回答数 | 60 | 51 |
| 回答率(%) | 96.8 | 98.1 |

表2 アンケート質問項目

| | 質問項目 |
|---------|--|
| Ⅰ 受講態度 | 1. あなたは遅刻(欠席を含む)をしませんでしたか。 |
| | 2. 授業に真剣に取り組みましたか。 |
| | 3. 予習・復習をしましたか。 |
| | 4. 授業で理解できなかった箇所や関連した箇所を教員・友人に聞いたり、自分で調べたりしましたか。 |
| Ⅱ 授業内容 | 5. シラバスは授業の目標、内容、成績評価方法を明確に示していましたか。 |
| | 6. 授業はシラバスに沿って進められていましたか。 |
| | 7. 授業内容のレベルはどうでしたか。 |
| | 8. あなたは、授業内容をよく習得または理解できましたか。 |
| | 9. あなたは、授業内容に興味を持てましたか。 |
| Ⅲ 授業方法 | 10. 教員の話し方(声の大きさ・話す速さ)は聞き取りやすかったですか。 |
| | 11. 板書、教科書、配付資料、視聴覚機器等は使われ方が効果的でしたか。 |
| | 12. 教員は、質問に適切に対応しましたか。 |
| | 13. 教員は、私語などを適切に注意して、学習にふさわしい雰囲気を保っていましたか。 |
| | 14. 教員は、開始・終了時刻を含め授業時間を有効に使っていましたか。 |
| Ⅳ 全体として | 15. 授業を受けて、全体として勉学への意欲・興味・関心などが促されましたか。 |

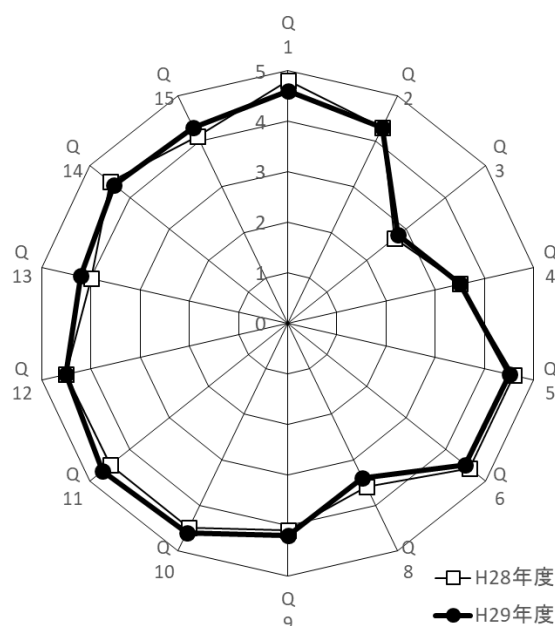


図2 設問別平均の比較

問9「あなたは、授業内容に興味を持てましたか」については、今年度は昨年度より0.1ポイント上昇した。図4に示す構成比を見てみると、D「どちらかというに興味を持てなかった」と回答した学生が9ポイント以上減少しており、「ウール講座」の追加した関係で評価が向上したものと考えられる。

また、問15「授業を受けて、全体として勉学への意欲・興味・関心などが促されましたか」については、今年度は昨年度より0.2ポイント上昇した。図5に示す構成比を見てみると、D「勉学への意欲・興味はあまり生じなかった」と回答した学生がおらず、

最後に、アンケートの自由記述では建築・インテリア専修やヴィジュアル専修の学生から興味・理解が深まった旨の回答が多くあり、ファッション専修以外の学生に対しても効果的な授業を行うことができたと考える。以上より、連携事業以外の授業内容の状況に影響を受けやすいことを考慮しても、生活材料学の内容について興味を持った学生が増加しており、連携事業による学習効果が有効であることを確認できた。

3. 結言

繊維産業への人材育成を図り、産地の発展に貢献することを目的として、ファッション素材の資料館「テキスタイルマテリアルセンター」を教育拠点に活用し生活材料学の習得度を向上させる教育として「ウール講座」を実施した。その結果、生活材料学の内容について興味を持った学生の増加が確認され、地域連携による学習効果が有効であることを確認できた。

今回は生活材料学の授業評価アンケートの結果のみで効果測定となったが、ファッション造形やファッションビジネスの習得においても基礎的な科目であることから、今後様々な面での効果測定が必要となると考えられる。

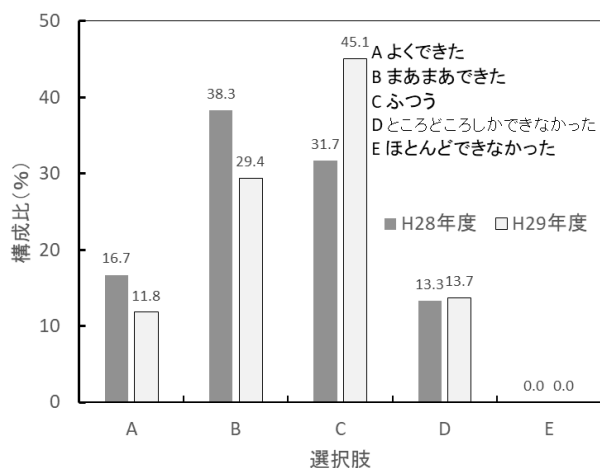


図3 回答構成比（問8）

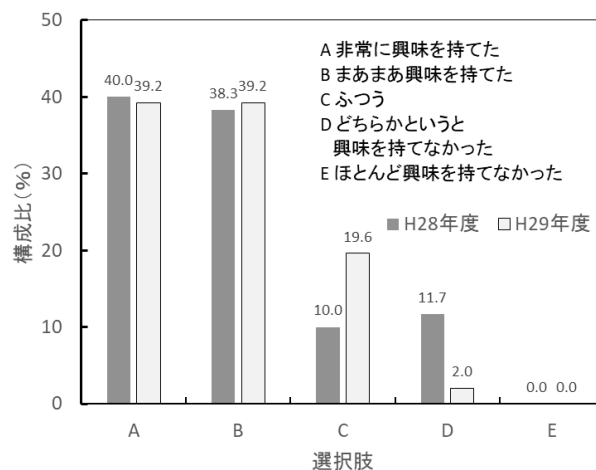


図4 回答構成比（問9）

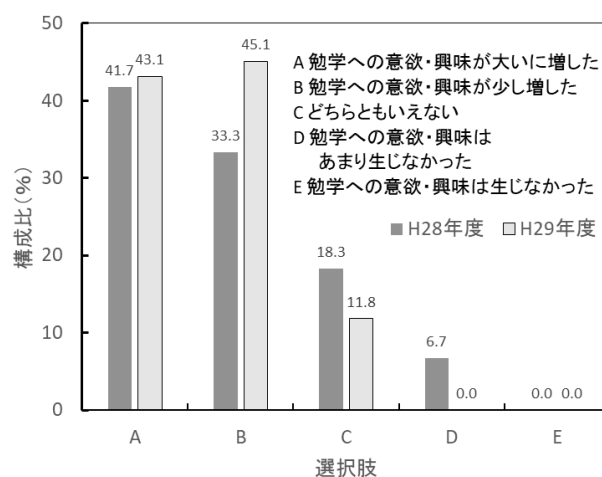


図5 回答構成比（問15）

文献

- 1) 「今後の繊維・ファッション産業のあり方に関する研究会」報告書 経済産業省 (2010)

(提出日 平成30年 1月 9日)